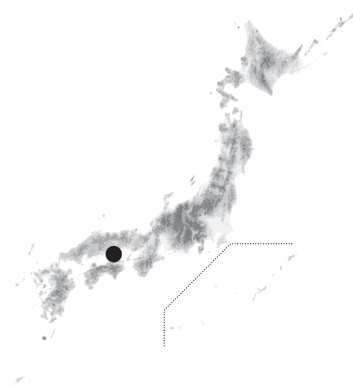


【四国】

豊かな島“豊島”産廃からの再生と 生物多様性への取組み



地 域：香川県豊島

実施主体：廃棄物対策豊島住民会議／豊島・島の学校実行委員会 ほか

報 告：NPOいきいき小豆島 萩本篤義

1. はじめに

豊島とは、香川県小豆島の西方4kmの所にある面積14.5平方km、人口約1000人の小さな島です。この島については、報道でも数多く取り上げられた「産廃の不法投棄の島」として知っておられる方も多いと思います。

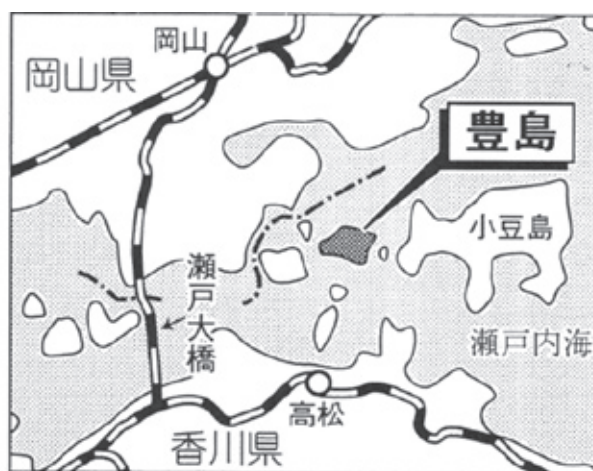
もともと、この島は名前の示す通り“豊かな島”で、早くから乳牛が育てられ、別名“ミルクの島”とも呼ばれた頃もあり、その環境から戦前のサナトリウムを転用して乳児院が開設され現在も運営されているような島です。

しかし、瀬戸内海の多くの島がたどっている高齢化と過疎化が進み、戦前の人口は現在の約3倍3000人も居たそうです。米の生産量は消費されるより生産量の方が多かった時代もありましたが、現在は全耕作地の6～7割が耕作放棄されていると言われております。

そんな瀬戸内の島々を活性化し、その魅力を世界に発信するために“瀬戸内国際芸術祭”が今年7月19日から10月31日の間「アートと海を巡る百日間の冒険」として開催されます。

2. 産業廃棄物の不法投棄と現状回復について

1975（昭和50）年、事業者による産廃の不法投棄を懸念した住民は反対運動をおこし署名や陳情などをしました。許可権限を持つ香川県は、いったん許



可を見送りましたが、事業者の主張から1977（昭和52）年、「許可の方針」を出しました。同年、豊島住民は「有害産業廃棄物持込反対豊島住民会議」を結成し処分場建設差し止め訴訟を提訴。そんな中、香川県は「ミミズ養殖による土壌改良剤化事業」の許可を出し、住民にミミズ養殖の受け入れを要求しました。

それから、事業者による不法な廃棄物の持ち込みがスタート、住民は野焼きによるススや異様な匂いに悩まされました。行政監察官や警察にも訴えましたが進展せず、1990（平成2）年、兵庫県警の摘発で事業者の操業はようやく停止。しかし50万トンを超える廃棄物が残されました。

香川県は1000トンほどの廃棄物撤去を持って「安全宣言」を出しましたが、1993（平成5）年、住民は香川県らを相手どって公害調停の申請を行いました。結果、「放置できない」実態が明らかになり、溶融による中間処理を経て処理の過程で出るすべての副生物を

さいりようすることを決めました。そして、香川県の責任問題についても1993（平成5）年、調停申請を行うと共に180日間にわたり県庁前での立ちっぱなし、県内5市38町、316kmもの徒歩での市町長に対する要請と県内100ヶ所での座談会を開催。そしてようやく2000（平成12）年6月6日知事の謝罪と共に7年にわたる公害調停の成立を迎えました。

2002（平成14）年暫定的な環境保全措置工事完了。
2003（平成15）年 中間保管・梱包施設/特殊前処理物処理施設・高度排水処理施設・中間処理施設完了直島への輸送開始。そして、「共創」の理念を掲げて
1.環境と安全への配慮（環境面と安全面に十分な配慮をしながら実施する。）
2.循環の実現（廃棄物の無害化だけではなく副生物の有効利用を行う。）
3.情報の公開：各施設の運転状況や環境計測は情報公開に努める。）

により廃棄物の処理を行うようになりました。

この産廃の不法投棄の問題は、「誰かがやってくれる」「自分さえ良ければよい」と言うエゴに立ち向かい、自立を果たすことが解決への道であることを改めて認識することでありました。

只、2003年9月から開始された豊島の産廃無害化処理事業は今年7年目を迎えることになります。当初10年で無害化処理を完了する計画からすれば相当遅れ気味です。

産廃特措法の補助金制度が2013年末で終了するので処理方法の見直しも検討されるようです。

3. 再生と“島の学校”

今年第8回目の“島の学校”の開催が予定されています。昨年の第7回島の学校は、2009年8月21日～8月23日に開催されました。カリキュラムと講師の方については以下のようなものでした。

・法律家クラスでは

弁護士を講師として「豊島事件と島の人たちの闘い」を学び

- 1.豊島事件とは
- 2.豊島事件と廃棄物法制の変遷
- 3.豊島の今とこれから

跡地の利用

豊島住民にとってこれからの豊島

豊かな島の心豊かなくらし

についてみんなで考えました。

・科学技術者クラスでは

大学院を講師として

- 1.水環境からみた豊島廃棄物問題と島の再生
- 2.豊島廃棄物問題の概要
- 3.ダイオキシンの問題
- 4.島の振興について
- 5.生態系の再生について

などを発表し「知恵を結集した共創の必要性」について考えました。

・メディアクラスでは

産廃不法投棄をスクープした豊島報道は90年から



産廃事件の経緯とその解決をうたえる島民



盆踊りを楽しむ島の学校の参加者達

9年に及ぶものでした。その山陽放送のアナウンサーを講師に「ジャーナリズムが見た豊島」と題して“豊島産廃問題を追って20年〜”をテーマに生々しい取材現場を、メディアの社会的役割として熱く語っていました。

・早稲田共創クラスでは

「処理終了後の豊島処分地の跡地利用について考える」で、豊島の住民が中心となって豊島ならではの思想と想いを共有・具現化するディスカッションの重要性和、3Dモデルでの案を提示しました。

・豊島の歴史クラスでは

広域行政組合からの講師を招き、豊島で産出する独特の豊島石の石造物の歴史や流通について写真や地図・グラフなどを使って説明されました。

・子供クラスでは

豊島小学校の6年生によるふるさと豊島や直島などの観光資源の説明と「もっと活気のある島にしよう」「もっと人口を増やせないか」「大勢の観光客に来てもらえないか」などPRし、最後に自分たちで作ったポスターを披露しました。

この島の学校は、単に産廃問題を調べ、勉強してこの悲劇を繰り返さない学習をするだけでなく、歴史のある自然一杯の豊かな島で自然に接し生きる力を体験して育て、自然との共生の中で人間の持つ“生命力”の養成する場に他ならないと感じました。

4. “再生への挑戦”豊島学(楽)会

豊島は産業廃棄物の不法投棄事件で「ごみの島」として日本で、また世界で知られることになってしまいました。いまでは原状回復を目指して、その廃棄物の撤去・処理も行われています。

こうした豊島になぜ、「学(楽)会」が創られることになったか、そのきっかけは「島の学校」にあります。

「島の学校」は毎年、夏に開催されます。島民の不法投棄産業廃棄物との長い戦いに関与した者、またそれに学ぼうとする人や島の自然に魅せられた者、棚田の再生に取り組んでいる人、さらには地引き網や海遊びなどの「島の学校」のイベントに興味を持った子供たちが、多数参加しています。

盆踊りやバーベキューパーティーのあと、島民の家に分かれて宿泊する。こうして島を知り、そこで暮らす人々の人情にふれ、その思いに共感を持った者たちが「豊島住民と共に学び、楽しみ、豊島の特性を活かした島づくりに寄与したい」と考えるのは、必然かもしれません。こうして、豊島学(楽)会は誕生しました。

でも「学(楽)会」とはなぜか?、これも「島の学校」に由来します。「島の学校」では標語として本年亡くなられた灰谷健次郎氏の言葉「学ぶことは変わること」を掲げていました。

学ぶこと、それは自分自身が変わること、成長することであり、それは心が躍ることであり、楽しいことです。楽しむことを目的とした遊びのなかにも、学びの要素は存在します。これらは堅苦しい専門家集団のイメージを持つこれまでの「豊島学会」では、表現しきれない



参加者による地引網体験

のです。

豊島の自然、人情、歴史、文化、廃棄物問題など、さまざまな事柄で豊島に興味・関心を持った方々は、「豊島住民と共に学び、楽しみ、豊島の特性を活かした島づくりに寄与したい」と思うなら、「豊島学(楽)会」に是非参加し、活動してほしいと思います。

5. 生物多様性への取り組み

(1) 遺跡調査から見た生物多様性の取り組み

瀬戸内海の中でも最も古く2万年前から人が住んでいた豊島ですが、遺跡調査は、その文化財的な価値と古代の瀬戸内海の生物の生育の歴史を探究する重要な調査です。

もちろん、文化財ですからその保存と発掘された遺跡の持つ歴史的な価値の意味づけは大切なものですが、生物の多様性の観点から見ると瀬戸内海の成り立ちと生物と人間とのかかわりが見えてきます。其の中で現存する生物との比較で海と島と里の持つ共生の仕組みも見えてきます。

活動している団体の一つに「犬島貝塚調査保護プロジェクトチーム」があります。そのメンバーの一人は、産廃の豊島に、たまたま立ち寄ったが負の遺産である産廃の持つエネルギーにも増して、豊かな豊島に魅せられて色々な活動をしている方でもあります。

この生物多様性プロジェクトの現地取材の発端も、豊島の産廃の汚染による生物の定点観測に始まり島の学校や豊島学(楽)会への関わりや遺跡調査をしているその方へのアプローチによる影響は大きい思い

ます。

(2) 海の生物定点観測

産廃による汚染物質の海洋汚染は、海の生態系に大きなダメージを与えていました。

産廃の不法投棄現場近くの海の磯ガニに汚染河川の66倍ものニッケルが蓄積、磯のカキからはダイオキシンが検出されました。

しかし、2001年には不法投棄現場には遮水壁が打ち込まれ、緑の絨毯のようなコアマモの中を歩くオサガニが出現。2003年にはアマモの根元に付いたイカの卵もみられるようになり、2004年にはスナガニが復活、アマモ場の回復面積も大きくなり、今や「命の干潟」と言われるようになりました。

しかし、現実には、まだまだアサリなど二枚貝の類は回復が遅く、大雨が続くと現場内に汚染水があふれる事故も起きています。

早く産廃の不法投棄以前の様にアサリや干潟の上で白いはさみを振っていた何万匹ものシオマネキの大群が見られるように干潟を観測し続けると言っておられました。

(3) 里海画報

一方、児島湾などで多産していた「ハイガイ」(その白い美しい姿は、まるで天使の羽根と発行者は呼んでいます)の殻が海岸に落ちており、結構な数を拾うことが出来たと「里海画報」で発表されています。この「里海画報」は、豊島・小豊島・犬島などの生物調査をしている人が出すニュースレター。遺跡の調査、アマ



アマモの生育を説明する市村さん



豊島のトランク

モヤカメノテ、ハクセンシオマネキ、コメツキガニ、アマモヤハボウキガイなどの調査レポートをフェリーのお客さんにも読んでもらうため、ほぼ毎月発行しています。

(4)「豊島のトランク」

可搬型資料館～「豊島のトランク」は、大型の旅行用トランクに不法投棄現場北海岸に大量に打ち上げられた貝殻を分類し透明なセルロイドのチューブに入れたものを豊島の写真パネルなどとともに納め各地の展示や学会や市民集会などにも持ち運べるようにしたものです。

現在は、3号・4号のトランクも造られ観覧者の足を止めるアイ・キャッチャーとしての役目だけでなく、豊島と他の島々をつなぐ役目も出てきました。

6. 最後に

産廃の不法投棄を闘った豊島の住民が再生に向けて動き出しました。決して島はひとつの結集があった訳ではありません。1000人の住民には1000の暮らしがあり、価値観や経験やいろんな事情も全て異なる住民は、いろんな意見もあり声の大小や過去のしがらみ、将来への展望など一つの活動についてもいろんな考え方や意見が出てきました。

島の学校の世話役の一人が「車はエンジンと言う推進力とブレーキとハンドルがあるから早い速度で走れる。豊島も一緒や!いろんな意見があるからこれだけのことが出た。これからも一緒や」と、云っております。

しかし、取材の中で一つだけ共通した価値観を感じました。それは、島民みんなが“豊島”が好きで自分たちの人生そのものをふる里“豊島”に感じ、誇りとしていえるということです。

2万年前から人が住んでいた“豊島”には、その間培われていた海とそれが運んできた文化と豊かな自然があり、それらを融合した多様性の中の共生が脈々と受け継がれております。それは、農耕や漁業から得た産物を糧とした、いわゆる農耕漁業文化です。急速に衰退した戦後の一次産業!それに代わり流通や金融や通信などの自由競争の世界。そんな時代の潮流に翻弄された豊島の現状に本来人間が遺伝子的に受け継がれた自然との共生能力＝生きる力を見ました!生物多様性とは、人間の持つ背丈に応じた生きる力と自然との共生に他なら無いと感じました。

ここに日本的な持続ある循環型の社会を作る大切さを豊島の事例で発見したと言っても過言ではないでしょう。

※廃棄物処理法の主な改正

「豊島の不法産廃廃棄」に端を発して、1997年度廃棄物処理法の改正によって産業廃棄物のマニフェスト制度が義務付けられ、1998年12月より施行されている。

その他、産業廃棄物収集運搬業に関する主な罰則事項が、不法投棄をした場合は、5年以下の懲役又は1,000万円以下の罰金(法人には1億円以下の罰金)にするなど、改正されました。

参考文献一覧

「豊島廃棄物等処理事業」パンフレット	香川県
“豊かさを問う―調停成立5周年をむかえて―	廃棄物対策豊島住民会議
「犬島水塚2009」犬島貝塚調査保護プロジェクトチーム第3回研究会：公演資料	犬島貝塚調査保護プロジェクトチーム
里海画報	市村 廉
豊島「島の学校」“豊島を学ぶ／授業 教科書	豊島・島の学校 実行委員会
豊島学会ホームページ	

豊かな島“豊島”

産廃からの再生と生物多様性への取り組み

